

平成22年度第1回公立大学法人秋田県立大学経営協議会  
議事要旨

1 日時：平成22年6月30日（水） 15：00～17：00

2 会場：ホテルメトロポリタン秋田 4階 「ルーチェ」

3 出席者

(委員)

郷委員、佐々木委員、種市委員、吉村委員

小林理事長、柚原副理事長、新岡理事、森理事、佐藤理事

(監事・参与)

吉崎監事、駒野参与

(事務局)

長谷部次長、長門本荘キャンパスリーダー、中泉チームリーダー、館岡チームリーダー、細山  
チームリーダー、干場チームリーダー、齊藤シニアスタッフ、畠山職員

4 議事

定款の定めにより理事長を議長として会議が開催された。

(●委員、○事務局)

(1) 定款に基づき経営協議会の議を経る必要のある事項について

1) 平成21年度事業報告書及び業務実績報告書について、柚原副理事長より説明があり、了承された。

2) 平成21年度決算報告について、佐藤理事より説明があり、了承された。

3) 事務職員の採用について、佐藤理事より説明があり、了承された。

4) 自己点検・評価の実施について、柚原副理事長より説明があり、次のような質疑応答が行われた。

●公立大学の認証評価というのは、ほとんど大学基準協会か。

○必ずしもそうではない。

○大学評価・学位授与機構の方は、今年は公立大学は14校になっている。だいたい半分くらいではないか。

●申請料は大学評価・学位授与機構に比べてどう違うか。

○ほとんど同じだと思う。どちらの方が厳しいかということがよく議論されているが、それはよくわからない。

●事業仕分けで、大学評価・学位授与機構の認証評価は民間に任せるべきだという議論があったが。

○民間に任せるべきということではなくて、ちょっと微妙な表現であった。その結果、国と随

分やりとりをして、大学評価・学位授与機構は一応潰されることはなさそうだと聞いている。

●審査料が違うのではないか。

○2学部で420万円である。

●「民間の認識に委ねる」というような表現であったが、「民間」というのが誰のことなのか分からない。

○公立大学協会としてもあれだけの量のものを民間の大学基準協会だけでというのは困るという話があった。大学評価・学位授与機構は国立大学、日本高等教育評価機構は私学大学、大学基準協会は両方やっているという構図。今のスケールから見ても、一挙に大学評価・学位授与機構の分を民間のふたつに押し込んだらとてもやれないということで、公立大学としても大変迷惑であるということを経務官へ言ってきた。

5) 規程の改正について、理事長より説明があり、了承した。

(2) 平成21年度第3回経営協議会(H22.3.16)以降の学内外情勢について

1) 名誉教授の称号授与について、佐藤理事より説明があった。

2) 次期学長(理事長)選考について、柚原副理事長より説明があった。

3) 平成22年度内部監査計画について、柚原副理事長より説明があり、次のような質疑応答が行われた。

●科研費の採択についても、あらゆる県にひとりとか、女性であれば特に良いとか、そういう話がある。いろんな研究品目に応じて、一箇所に集中しないような形でやれば良いと思う。

●我々のところも、教育文化が申請率50%を切っている。出し方がわからないというので、担当の科の方で全部教えて出させるというのをやっている。

○新潟理事に書き方を指導してもらっているが、その結果、2件~3件増えたくらい。

○残念ながらあまり効果はない。

●県立大学は科研費は採られているほうではないか。

○全国平均より下。せめて全国平均くらいまではもって行きたいと思う。

○開設からしばらくの間は、県からの予算で潤沢だったが、このご時勢になるとそんなこと言っていられない。

4) 秋田県立博物館との連携協力協定について、新潟理事より説明があった。

5) 鳥海高原「桃野」菜の花まつりについて、新潟理事より説明があった。

6) 平成22年度「大学教育・学生支援推進事業」の申請について、森理事より説明があった。

7) 平成22年度「大学生の就業力育成支援事業」の申請について、森理事より説明があり、次のような質疑応答が行われた。

●文科省が途中でルールを変えた。件数が足りないので、一方へ申請したら他方へ申請できないというような制約を外して、間口を広げた。その結果やたらと分母が大きくなってしまった。

○応募総数を見たときたんがびっくりした。

○このふるさとキャリアの一期生の女子学生が、ある酒蔵に弟子入りチャレンジして、この3月に就職が決まった。「22歳の挑戦」ということで、大潟村で米を作って、その酒造と組んでお酒を出した。非常においしいお酒で。そういう実社会に通じていくような形になっていけばいいなど。

○あまり就業力とかキャリア教育とか言うと、大学は職業訓練所ではないという反論が必ず出る。その辺の兼ね合いが難しいところである。

8) 英語教育検討ワーキンググループの報告について、森理事より説明があり、次のような質疑応答が行われた。

●教えている先生がばらばらだというのは、文科系としてはきわめてありえる事態だと思うので、そこをやはり固めないで。何を提供するかと言われても、提供する側の共通理解がなければ話が前に進まないのだから、その辺はかなりきっちりすべき。

○少なくとも英語の教員については非常勤ではなく常勤の先生方なので、打合せはやろうと思えばいくらでもやれる。

●レベルの違いはどこの大学もみな頭を抱えていて、究極の解はないと思う。

○クラス割りをすると先生が足りなくなってしまう。

●結局 TOEIC とかを使って、特別クラスを作ってみたりしている。ただ、英語を使わないで将来暮らしていけると思っている若者がどんどん増えているのは、非常に困ったことである。英語どころかこれからは中国語をやらないといけないのではないかという感じがするが、そういう実態と感覚とのズレは、こちらの大学だけではなく東京でも同じであり、結構深刻なことだと思う。就職のことを考えるにしても、このぐらいの学力保証はやっていますよというのは、マイナスにはならない話ではないかと思う。むしろまだ英語をやっているのかという話もあり得るので、本当は第2外国語をもうひとつやふたつくらいやる学生が出てくるのをどう応援するかという取組の方が魅力的かもしれない。この話は繰り返し出てくるので、各学部からの率直な意見を出してもらい、徹底的に議論すべき。

○例えば、学力別にして同じクラスを作り、片方は「優」のクラスにして。しかし授業評価をするとどちらからも「優」が出てくる。そうすると、先生方によってはレベルの違うクラスなのに、なぜ同じ「優」をつけるんだろうという別の次元での議論が起きてしまうので、非常に困っている。

●こういうものについては、もう頭を切り替えて処理するしかない。物理とかと違う基準を作って割り切らないと、そういう話をいつまでもやっても前に進まないと思う。先生方もその割り切りをなかなかできないものだから、いろんな問題につながる。

○生物でも化学でも同じことが言える。

●お茶大は、入学してすぐ業者に頼んで一斉に試験をして、英語だけは学力別にクラスを作っている。

○何段階か。

●教員の数もあるので、そんなにたくさんはない。同じことを最近名古屋大学も始めた。入学

したときは、高校で試験勉強を一生懸命してきたからいいが、普通は大学に入って落ちてしまうので、それをキープすることと、どれくらい伸びたかということがテストを受けるたびに分かるので、そういうことに対する評価をしている。教育のプログラムの問題は、先生たちにお任せしておくとなかなかうまく行かないことがあるので、本部を大学の中に作って方針を立てないといけないのではないかと思う。

○この委員会には現役の英語の先生は入っていない。英語以外の教員、及び開学の時に世話をしてくれたOBの先生にお願いしている。

●こちらは理系だから、何が英語で必要かということがわりとはっきりしていると思う。昔は教科書が英語だったが、今は翻訳があるため英語を読まない。それも大きな問題である。でも生物系の言葉はなかなか翻訳が追いつかない段階なので、最先端の話を理解するためには英語で読まないといけないというのが本来だと思う。やはり語学の先生方に理系の英語のレポートの書き方を見てもらうのは難しい。そこはある程度プランを大学の方で作って、一定のレベルの中身を提案されることも必要なと。

●この検討報告のとおりだと思うが、あまり楽しくない。僕らが育ってきた過程では、例えば英語の歌を歌いたい、映画の役者が何を言っているのか聞きたいとかそういうきっかけがあった。今、科学のオリンピックもあるが、日本には中学生が自分の技を磨くための挑戦すべきいい問題がない。そうすると、彼らはインターネットで外国用の科学あるいは数学とか物理の問題を探す。やはり楽しく興味をつないでいくような仕掛けが必要。読解力でいえば、エンターテイメントを理解するとか。

○CALL教室の教科書は、結構そういうのが入っている。

○ただ文章そのものが非常に易しい。大事なことは英語で考えて英語で話せるということで、日本語で返さないことを練習させるシステムになっているので、文章そのものが簡単である。

●我々の業界でも、外国に行って一生懸命発表したりしているのがいる。その連中が何を努力しているのかと言うと、やっぱりヒアリングの能力。英語の教育自体、もう少し将来の目的というか教え方があるんじゃないか。一番単純な話では、英語しか使えないホームステイをやるとか。

●我々の英語教育では、入学時に新入生全員にテストを受けさせて、能力別クラスを作って、1クラス40名で英語の授業をするということをしてきた。去年英語の先生7名と話し合いをしたら、30名の少人数英語教育で東北地区のモデル校を作るから、もう2人定員をつけてほしいと言われ、4月に外国人1人と日本人1人が採用になって30人学級にした。そしたら最近、今年入学した学生の学力が低いので、もっとなんとかしてくれと要求が上がってきている。

○「第2外国語」について、学生との懇談会で、第2外国語をちゃんと勉強できなければ困るという苦情が出た。我々のところは英語の先生は揃えているが、それ以外を揃えていないので、放送大学にお世話になっているが、登録の時間の問題もあって難しい面がある。また、学生に第2外国語が大事だと思うかどうか尋ねたら、ほとんどが大事だと思っていた。やっぱり学生の側に勉学の意欲がないわけではない。しかも、何を第2外国語に取りたいかと聞いたら、フランス語だと。

●それは秋田大学と協力しながらやればいいのでは。

○今後いろいろ工夫していきたいと思う。

9) ヒマラヤプロジェクトについて、理事長より説明があった。

10) 大学ランキングについて、柚原副理事長より説明があり、次のような質疑応答が行われた。

●大学ランキングについての県庁および県内の反応というのは。

○まだ出たところなので。

○この大学ランキングの結果は、先週根岸教育長に渡した。アジアランキングは、上位200のうち151位だったが、どういうわけかわからないが、2010年はランク外になった。2月ころにピアレビューを推薦しろと言われ、こちらからピアレビューを12～3名と企業も14～5社推薦した。ランク外になったので、ピアレビューに何か照会があったかと聞いたら何もないと。どうも今回のには間に合わなかったのではないかという気がしているが、来年も漏れたらそれが事実だろうと思う。

○やり方がオープンになっていないので、よくわからない。

(3) その他

・産学連携の現状について、新潟理事より説明があり、次のような質疑応答があった。

●特許はどういうカウントになっているか。

○特許はだいたい20件くらい申請があって、特許出願まではうまくやるようにしている。法人化以来、大学に権利が来るように努めていて、ほとんど大学の権利で申請している。だいたい3年経つと審査請求をしないといけないが、審査請求になるとお金がかかるので、予算とにらみ合いながらやっている。審査請求だけは厳しくして、質問だけは省略するというのをやっている。残念ながらまだ経営のことを考えながら特許を扱うという段階までは来ておらず、今のところは特許をなるべく書いてもらい、審査請求も厳しくしている。企業からの問い合わせも全くないものについては審査請求しない例もあるが、ちょっとでも可能性があれば審査請求もするようにしている。1件、これはやめようと思った途端に企業からの問い合わせがあり、あわてて特許を申請した例もある。特許は、小さな大学で目利きになってこれはものになりそうかどうかを判断するのは、すごく難しいと思っている。

○法人パンフレットの後ろに、平成18年からの特許シーズで件数が出ている。

○非常に大事にしているのは、先生たちに特許を取るという意識を持ってもらうこと。中には学生と一緒に申請する例もあり、それも奨励するようにしている。

●案外学生がいいものを出してきて、ものにするときには学生の方が能力が高いという話もよく聞く。東大でも、挙がってきたもののセレクションをどのくらいの期間でやっているのか、リスクというかコストを負うのが大学か本人か、というのが非常に難問だった。

以 上